派遣報告書

氏名：中村隆之
派遣先：ヒルデスハイム大学（ドイツ）
派遣期間：2012 年 11 月 20 日〜2012 年 11 月 26 日（7 日間）
派遣（研究）の概要：

ヒルデスハイム大学で 2012 年 11 月 22 日から 24 日にかけて開催された国際セミナー「学問の鏡に映る文化」（Kultur im Spiegel der Wissenschaften）に参加し、23 日のセッション「諸文化間の文学」（Literatur Interkulturell）において、研究課題に基づいた報告をフランス語で発表するとともに、セミナーへの参加を通じて、ヒルデスハイム大学および東京外国語大学の研究者と交流をおこなった。

セミナーでは「「非-歴史」の詩学―エドゥアール・グリッサンにおける歴史の問題圏再考」（Poétique de la non-histoire： Repenser la problématique de l'histoire chez Édouard Glissant）という題目で発表を行った。この発表は東京外国語大学に提出した博士論文「エドゥアール・グリッサン―「反-歴史」の詩学」（2006 年）に基づき、その要点をまとめ直したものである。

「非-歴史（non-histoire）」は「歴史」として言説化することのできない「歴史」を指し示す語である。グリッサンにとって「歴史」は時間意識、集合的記憶などに基づいて形成されるものだが、カリブ海では、西洋の植民地支配との関係で、時間意識も集合的記憶も断片的にしか存在せず、「歴史」が言説となりえないとグリッサンは考える。この「非-歴史」という否定的様態をいかに乗り越えて「歴史」の言説を作り出すかが作家の課題であるが、結果的に言えば、この試みは「失敗」せざるをえなかった。これが発表で確認した第一点目だった。

二点目は、「歴史」の言説を作り出す試みとして、グリッサンが植民地主義、奴隷制を拒絶する存在として逃亡奴隷を描いてきたことを述べた。その後、グリッサンの「意図を超えるもの」という考えを説明し、作品とは「作者の意図」では完結しないというグリッサンの文学認識を確認した。その上で、今度は、グリッサンの描くこの抵抗者の物語を別の形で読むことを提唱した。その一例として挙げたのが、アフリカの言語しか喋れない逃亡奴隷が、カリブ海に生まれてクレオール語しか話せない女奴隷を誘拐し、森で共同生活を始めようとする場面である。ここでは二人のコミュニケーションが成り立たないことが問題となる。しかしながら、ある日、森から逃げようとする彼女の前にいつものように立ちはだかる逃亡奴隷がクレオール語のようなものを口にしたとき、彼女はこの男と生活を共にする決意をするのだが、その文章には異質性が残る。この異質性についていくつかの解釈を提示した後、その異質性はおそらく「作者の意図」を超えた何かとして残っているのではないか、という仮説を示した。そして足早ではあるが、このコミュニケーションにおける不透明性が、実は、それ自体あるがままに再現できない過去（その象徴は奴隷船である）をいかに物語るかという問いに係わる「非-歴史」を、われわれに垣間見させる瞬間なのではないか、と結論づけた。

派遣による研究の成果：

発表に対しては司会者および聴衆との質疑応答をつうじて有益なコメントを得た。とりわけヒルデスハイム大学のロマンス語言語学者アネット・サバン（Anette Sabban）氏が、セミナー終了後、派遣報告者のテーマに関連するドイツ人研究者二名（共にフランス語圏文学研究者）の連絡先を紹介してくれたことは今後に繋がる成果だったと言える。なお、本発表に基づいたフランス語論文は国際セミナーの記録集に収められる予定である。

今後の課題：

グリッサンにおける「歴史」の問題は、グリッサン研究においては主要な問題群と言ってよい。この問題群を「非-歴史」という観点から捉え直したところに本研究の独創性があるとすれば、その独創性をどのように今後に活かすかというのが目下の課題である。とはいえグリッサンには「歴史」の問題に限らず様々なテーマがあり、それらが相互に結びついている。グリッサンを包括的に論じる視点を養うことも今後の課題である。